

編集後記

『年報』第二十六号をお届けする。昨年度に引き続き、グループ研究等からの「特集」のご希望がなかったため、本号も所員からの投稿論文で編集することになった。「論文」は七編と例年より多く、これに「研究動向」と「書評」の各一編が加わった。編集子の記憶では、英文の論文が『年報』に掲載されるのは、これが初めてのことではないかと思う。

慣例では、「書評」は学外の研究者にお願いすることになっている。「身内」の議論の殻を破るためであるが、今回それを踏襲できなかったのは以下の理由による。昨年六月に投稿希望を募った際、申し込みは論文八編、研究ノート二編、研究動向一編にのぼり、合計すると予定枚数を二百枚（四百字詰め原稿用紙）以上も上回る計算になった。そこで、編集委員会（石塚、加藤浩平、広瀬、鈴木）は、執筆を申し込まれた方々に希望の枚数を削って頂く可能性があることをお知らせすると同時に、論文等を優先して、本号には「書評」を掲載しないと決定した。だが、幸か不幸か、締切り直前になると辞退される方が相次ぎ、今度は一転して、予定枚数を大きく下回ることになった。このため、急遽、書評を掲載することになったが、何分にも執筆期間が短く、外部

の方をお願いする余裕がなくなってしまった。編集子としては、やや安直な方法であったと反省し、次号からは従来の慣行に戻る予定である。

以上の点を除けば、編集作業は概してスムーズに進んだ。なかでも、締切りから一週間を越えない期間に、ほぼすべての論文が寄せられたことは編集子としてはやや驚きでさえあった。執筆者の方々のご協力に厚く御礼を申し上げます。また、海外との連絡をはじめ、例年以上に多かったと思われる編集実務の多くは、竹内佐和子氏の手をわずらわせた。記して、感謝したい。例年通り、本号の刊行にあたっては、公人社の大出明知氏に大変お世話になった。心から、御礼申し上げます。

すでにご承知のように、この四月から、当研究所の所長に麻島昭一氏、事務局長に高橋祐吉氏がそれぞれ就任した。来年度には所長のリーダーシップのもとで、「社研四十年史」の編集作業が開始される予定である。所員の方々はじめ、皆様方のいっそうのご協力をお願いしたい。

（鈴木 直次）